1部70円（税抜き）

対がん協会報

第612号　2014年（平成26年）7月1日（毎月1日発行）

公益財団法人 日本対がん協会　「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100－0006　東京都千代田区有楽町2－5－1　有楽町センタービル（マリオン）13F
☎（03）5218－4771　http://www.jcancer.jp/

主な内容

1、2面　2013年厚労省人口動態統計速報
4、5面　がん相談ホットライン年報より
8面　リレー・フォー・ライフ・ジャパン 今後の開催予定

がんによる死亡は36万4721人　前年より3700人増

目立つのは肺、膵、乳

2013年厚労省人口動態統計（概数）

昨年1年間にがんで亡くなった人は36万4721人で、前年より3700人増えたことが、6月4日付で厚生労働省が発表した人口動態統計（2013年・概数、前年は確定数）でわかった。全体の死亡者は126万8432人。ほぼ3.5人に1人ががんで亡くなった計算になる。主な死因の対前年比の増加数でみると老衰（約9000人増）に次いで多い。中でも、肺がん、膵臓がん、乳がんの増加ぶりが目立っている。

主ながんの死亡数を男女別にみると、男性では肺がんが最も多くて5万2039人、次いで胃がん3万1963人、大腸がん2万5800人、肝臓がん1万9808人。前年との比較で増加ぶりが著しいのは肺がんで667人増えている。大腸がんも271人増えた。一方で、胃がんは243人、肝臓がんでは252人、それぞれ減少した。

女性では大腸がんによる死亡が最も多くて2万1838人、前年より91人の増加となった。次いで肺がんの2万672人、胃がんの1万6651人、乳がん1万3145人、肝臓がん1万355人などとなっている。

女性のがん死亡で増加ぶりが目立つのは、乳がんと肺がんだ。乳がんは前年より616人、肺がんは526人、それぞれ増加している。乳がんによる死亡は前年、その前の年より200人ほど減少したものの、近年の急増ぶりが改まったわけではないことが、今回の発表で裏付けられた形だ。肺がんの死亡が増えているのは男性と同じ傾向で、このままの増加ぶりが続くと、女性のがん死亡で最も多くなる恐れが大きい。

（2面に関連記事）

主な部位別にみたがんによる死亡数＝厚生労働省の人口動態統計より、2013は概数、他は確定数

	1965	1975	1985	1995	2005	2010	2011	2012	2013
男									
胃	28,636	30,403	30,146	32,015	32,643	32,943	32,785	32,206	31,963
肝	5,006	6,677	13,780	22,773	23,203	21,510	20,972	20,060	19,808
肺	5,404	10,711	20,837	33,389	45,189	50,395	50,782	51,372	52,039
大腸	3,265	5,799	10,112	17,312	22,146	23,921	24,862	25,529	25,800
女									
胃	17,749	19,454	18,756	18,061	17,668	17,193	17,045	16,923	16,651
肝	3,499	3,696	5,192	8,934	11,065	11,255	10,903	10,630	10,355
肺	2,321	4,048	7,753	12,356	16,874	19,418	19,511	20,146	20,672
乳房	1,966	3,262	4,922	7,763	10,721	12,455	12,731	12,529	13,145
子宮	6,689	6,075	4,912	4,865	5,381	5,930	6,075	6,113	6,032
大腸	3,335	5,654	8,926	13,962	18,684	20,317	20,882	21,747	21,838

がん相談ホットライン　祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談（無料、電話代は別）に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」（☎03-3562-7830）を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談（要予約）
予約専用　03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談（ともに無料）を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分（診療ではありません）。詳しくはホームページ（http://www.jcancer.jp/）をご覧ください。

近年増える膵臓がん 男女合わせて3万人を超える 糖尿病の増加が影響か

厚生労働省の2013年人口動態統計（概数）で膵臓がんによる死亡者が男女合わせて３万648人と前年（確定数）より732人増え、肝臓がん（３万163人）を上回った。

膵臓がんの増加ぶりは近年著しい。背景には糖尿病患者の増加があるとみられる。膵臓がんは早期発見が難しく、見つかった際にはかなり進行しているケースが多い。５年生存率も10％足らずとされ、治療が困難ながんの一つだ。治療法の開発とともに、早期発見法の確立が望まれている。

2013年の人口動態統計（概数）では膵臓がんによる死亡者数は男女別には発表されていないが、2012年までの状況をみると、男女とも増えているのは確実視される。

2012年の統計では、男性が１万5517人で男性のがん死亡の５番目で、女性は１万4399人で４番目だった。2005年よりも男性が3233人、女性は3756人、それぞれ増えている。

膵臓がんのリスク要因として、喫煙とともに糖尿病が、大規模疫学調査などで指摘されている。その糖尿病について、厚労省の国民生活・栄養調査（2012年）によると、「糖尿病が強く疑われる成人」は950万人で2007年の調査より60万人増えている。実際に診療を受けている患者数も増加していることが患者調査で分かっている。

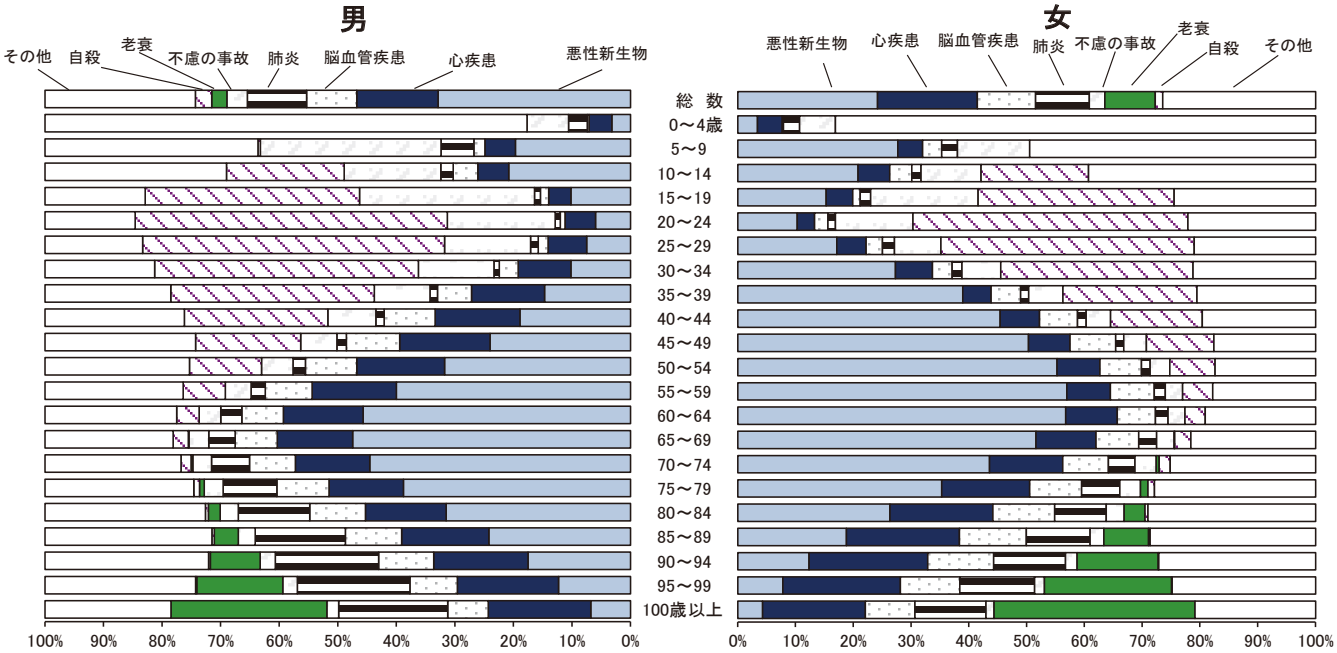
膵臓がんによる死亡が急増するのは60歳以上で、死亡者の９割を占めている。これも糖尿病を患う期間が長引くとともに、膵臓がんのリスクが増えることを示しているとみられる。糖尿病の３大合併症として、網膜症や腎症、神経障害がよく知られている。糖尿病への対策を進めないと、膵臓がんも「合併症」の一つに挙げられることになるかも知れない。

50代後半で亡くなる女性の6割近くががんによる死亡 男性は60代後半

厚生労働省の2013年人口動態統計（概数）で死因を５歳毎の年齢階級・男女別にみると、女性では30代前半からがんが目立ち始め、40代後半で５割を超えて50代後半で６割近くと、ピークを迎える。60代に入ってやや減少するとはいえ、それでも60代は前半後半とも５割以上を占めている。

男性でがんによる死亡が増えるのは40代に入ってから。60代後半にピークを迎える。ただ、がんが占める割合は５割に満たない。

女性のがんによる死亡が比較的若い世代で増える背景には、20代、30代では子宮頸がんが、30代後半から40代にかけて乳がんが、それぞれ増えていることがあるとみられる。働く世代、子育て世代でがんによる死亡を減らすには、思春期からのがん対策が重要なことが、人口動態統計からも読み取れる。



年齢階級・男女別にみた主な死因の構成割合（2013年）＝厚生労働省人口動態統計（概数）より

日本対がん協会グループ全国事務局長会議

厚労省椎葉課長が、国の新たながん検診指針など解説

日本対がん協会グループの2014年度全国事務局長会議が6月30日、東京・有楽町で開催された。垣添忠生会長、秋山耿太郎理事長、新任の塚本章人常務理事の挨拶に続き、厚生労働省健康局　がん対策・健康増進課の椎葉茂樹課長が、「日本のがん対策―がん検診のあり方について―」と題して講演を行った。椎葉課長は国のがん対策の概略を説明し、特にがん患者の就労に関する課題と支援事業、平成25年12月に成立した「がん登録推進法」について詳しく説明した。また、平成26年6月25日付で公布・施行となったがん検診指針改正によって、医師の立会いなしに胸部エックス線撮影が可能になったことを報告した。

厚生労働省の椎葉茂樹課長

これに伴い、肺がん検診で医師が立ち会わない場合に「問診」に代わって必要とされる「質問」についても説明した。会場からは「今後は『質問』やがん登録の際に、例えばがん検診で見つかったなど、がんがどこで発見されたかわかるようになるのか」などという質問があった。これに対し、椎葉課長は「質問項目にはこのがんが何で見つかったということも含まれているので、どこで見つかったかはわかる」などと答えた。

全国から集まった事務局長

その後、日本対がん協会の新たな厚労省委託事業の内容や、今年度のピンクリボンフェスティバルや、リレー・フォー・ライフ・ジャパンの計画、がん征圧全国大会の概要や、今年度も各地で実施される各種研修計画などが、それぞれ対がん協会の担当者から報告・説明され、各支部に一層の協力を求めて閉会した。

日本対がん協会理事会・評議員会 新役員・評議員決まる

公益財団法人日本対がん協会は東京都内で6月3日に理事会、同18日に評議員会を開催し、任期満了に伴う役員・評議員の改選を行った。評議員会を経て就任した新役員・評議員は次の通り。

◆常務理事　塚本章人（前BS朝日常務取締役）、堀田知光（国立がん研究センター理事長）、門田守人（がん研有明病院院長）

◆理事　今村聡（日本医師会副会長）、高山靖子（資生堂監査役）

◆監事　田畑良治（朝日新聞社財務本部長）

◆評議員　アグネス・チャン（歌手・タレント）、坂下千瑞子（東京医科歯科大学特任助教）、佐々木常雄（都立駒込病院名誉院長）、中川恵一（東京大学医学部附属病院准教授）、野田哲生（がん研究会がん研究所所長）、福地献一（朝日新聞社取締役財務担当）、堀正二（大阪府立成人病センター名誉総長）、山根則幸（予防医学事業中央会理事・事務局長）。また、新事務局長には理事の伊藤正樹が選出された。

改選に伴い退任した役員・評議員は以下の通り。

◆副会長　武藤徹一郎（がん研究会メディカルディレクター・名誉院長）

◆常務理事　塩見知司（日本対がん協会事務局長）、高山昭三（高松宮妃癌研究基金理事長）、横倉義武（日本医師会長）

◆理事　児玉孝（日本薬剤師会会長）

◆監事　小畑和敏（朝日新聞社常勤監査役）

◆評議員　阿部圭介（朝日ビルディング社長）、牛尾恭輔（国立病院機構九州がんセンター名誉院長）、北川知行（がん研究会がん研究所名誉所長）、土屋了介（神奈川県立病院機構理事長）、富永久雄（静岡県監査委員）、野村和弘（東京労災病院名誉院長）、廣橋説雄（慶應義塾大学医学部特別研究教授）、藤井達也（朝日新聞社取締役）、山内邦昭（予防医学事業中央会常務理事）。

相談件数は9,699件　がん相談ホットライン2013年度年報

日本対がん協会相談支援室は、がん相談ホットラインの2013年度の年報を発行した。がん相談ホットラインは、看護師や社会福祉士が電話で相談を受けている。予約は不要で、受付時間は祝日と年末年始を除く毎日午前10時から午後６時まで。相談者と相談員はお互いに匿名で相談を行う。2006年に開設し、現在相談員は17人。電話を受けたらまずは相談者の話を十分に傾聴し、得られた内容から何を問題としているのか明らかにし一緒に考えていく。そのうえで必要な情報の提供や、心理的なサポートを行うなど、内容を確認しながら対応していく。また、業務終了後にグループスーパービジョンを行い、受けた相談の対応が適切であったか検討し、相談の質の向上に努めている。

増えるリピーター

2013年度の相談件数は9,699件。１ヶ月間の平均相談件数は808件で、月別にみると10月が最も多かった（**図１**）。これは９月のがん征圧月間や10月のピンクリボン月間にあわせて、マスメディアで取り上げられる頻度が増えたり、関連イベントが全国各地で開催され、がんについて触れる機会が高まった影響と推察する。

このうち複数回利用した方は25.7%で、2012年度から6.0%増加した。４分の１以上がリピーターであることがわかった。

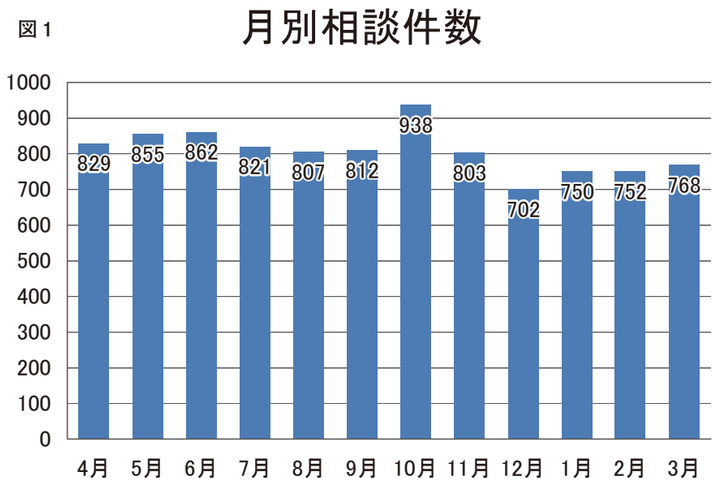
相談者の続柄は、患者本人が60.9%、妻が10.8%、娘が10.2%と続く（**図２**）。2012年度と比べて、本人からの相談が1.8%増加した。

相談内容は、「治療」に関する相談が25.6%と最も多く、次いで「症状・副作用・後遺症」20.0%、「不安などの心の問題」は18.6%と続く（**図３**）。前年度から順位に変動はないが、「不安など心の問題」は2.4%増加し、過去最も多い割合となった。ひとつの相談に複数の問題が絡み合っている場合が多いが、主たる内容を集計している。

当年度、相談員が気になった相談内容のひとつに「周囲に話ができない辛さ」が挙げられた。がんの疑いがあると言われたとき、診断を聞いたとき、治療中、経過観察中など状況や、患者を取り巻く環境によって、抱える不安や心配は様々だ。身近な人に話すのは「相手に負担をかけてしまうのではないか」「また同じことを言っていると思われないか」とためらう場合もある。患者本人の心の内は周囲からはなかなかわかりにくく、一見元気な様子であったり経過が順調などと聞けば、周囲は楽観的なとらえ方や反応になりがちだ。これは自然なことだが、患者本人の感覚とはずれが生じ、それもまた患者の悩みのひとつになることがある。一方で、家族の立場から「不安なのもわかるが同じことを何度も言われるとこちらも辛くなる」「優しい気持ちで話を聞けない」と相談があることも事実だ。

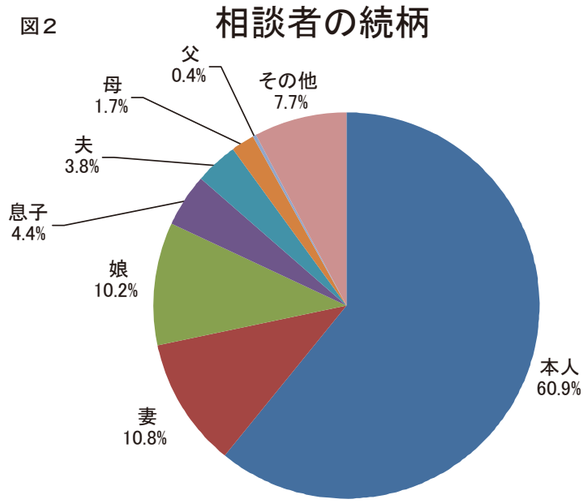
「誰にも話せない」と切羽詰った様子で電話がかかってくることがある。「ただただ誰かに聞いてほしい」、そんな内容も遠慮せずにかけてきてくれたら、と相談員は話す。どうかひとりで抱え込まないでほしい。尽きない不安や心配に対して、気兼ねなく話せる場が必要であり、ホットラインがそのような場になるよう一層努めていく。

図１



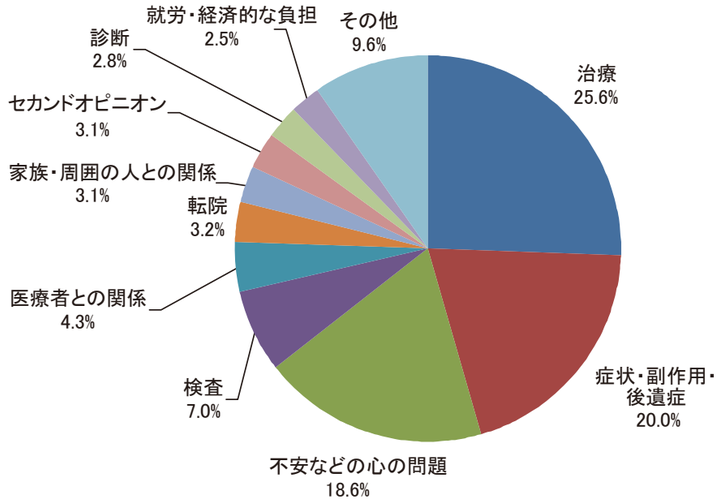
相談者の話を聞く相談員

図２



相談支援室の外観

図３



専門職への信頼感

相談者からは「何度も利用しているが、ホットラインは情報だけでなく医学的な知識をもとに、気持ちを受け止めてくれるので、感謝している」「そんなふうに言ってくれると、主治医の言っていることがわかる」「まとまらない話をじっくり聞いてくれるので、感謝している」などの声が寄せられた。がんに関する知識を持つ専門職が真摯に耳を傾けている…そういったことが安心感や信頼につながっている。

年報には、この他にも相談実績の概況や相談員が特に注目した相談内容、電話相談以外に相談員が行った活動などを掲載している。対がん協会支部、がん診療拠点連携病院などに配布する。

がんに関する疑問や心配、不安を抱えたときに、患者本人に限らず家族などどなたからでも、そして全国どこからでも気兼ねなく電話をかけられるような相談窓口をめざし、日々相談者の声に耳を傾けている。

奨学医募集　米テキサス大MDアンダーソンがんセンターで1年間研修

公益財団法人日本対がん協会は７月１日付で、米国テキサス大学MDアンダーソンがんセンターで１年間研修を受ける若手医師の公募を始めました。募集人数は２人で、奨励金として１人200万円を支給します（渡航費を含む）。締め切りは10月31日（消印有効）です。多くの方々の応募をお待ちしています。

このプログラムは、「RFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞」と名付けた奨学制度で、日本の地域がん医療の拡充に貢献できる若手医師の育成が目的です。MDアンダーソンがんセンターの協力と、一般社団法人「オンコロジー教育推進プロジェクト」の支援を受けて2010年度にスタートさせました。上野直人・同センター教授のアドバイスを受けて実施しています。

運営の資金は、がん患者・家族を支援する「リレー・フォー・ライフ」に寄せられる寄付です。がん患者・家族を支援するための資金を募ろうと、日本対がん協会が、各地の実行委員会と一緒に開催しているイベントです。

がん患者・家族の方々の支援には、がん医療を充実させることが重要です。広い視野をもち、強いリーダーシップのもと患者・家族に寄り添える医師の養成が欠かせません。

日本対がん協会は「奨学医」制度を設けて国内のがん専門病院での研修を実施していますが、MDアンダーソンがんセンターでの研修では、欧米に比べて遅れていると指摘される臨床試験を中心に学んでもらう予定です。もちろん、患者・家族とのコミュニケーションなど、患者を中心とした医療システムに触れてもらうことも重要だと考えています。米国で学んだことを日本の各地の実情に応じて工夫し、患者中心の、真にEBMに基づく医療を根付かせてほしい、そんな願いをこめています。

希望者は日本対がん協会のホームページ（http://www.jcancer.jp/）から申請書をダウンロードし、必要事項を記入したうえで、下記に郵送してください。日本対がん協会内に設けた助成審査委員会で一次選考し、MDアンダーソンがんセンター側で２次選考をします。

〒100-0006東京都千代田区有楽町２-５-１　有楽町センタービル（マリオン）13階　公益財団法人日本対がん協会・助成審査委員会　MDACC係あて。

問い合わせは、日本対がん協会マネジャー小西（☎03-5218-4771）までお願いします。

「化粧のちから」で笑顔に　ビューティーケアセミナー@マリオン

資生堂の左から澤田保子さん、関ゆりさん、横山雅美さん

６月28日、東京・有楽町で乳がんや子宮頸がんなどを経験または、現在治療中の人を対象に「ビューティーケアセミナー@マリオン」（主催：日本対がん協会、協力：資生堂 ライフクオリティー ビューティーセンター）が開かれた。このセミナーは、抗がん剤治療の影響で眉やまつ毛の脱毛や、強いくすみやシミ等、肌に深い悩みをお持ちの方に、一人一人にあった眉やアイラインの描き方や、肌色をカバーするメーキャップ方をまなんでもらうもの。日本対がん協会の「乳がんをなくすほほえみ基金」の事業の一環として2008年からスタートした。

協力の資生堂は2006年に開設した「資生堂 ライフクオリティー ビューティーセンター」（東京・中央区銀座）の他、全国約370か所の化粧品専門店やデパート・医療機関で、がん治療の副作用による肌色の変化や眉・まつ毛の脱毛のほか、あざや白斑、傷あと、やけどあとなど、幅広い美容上のお悩みを解決するお手伝いを行ってきた。対がん協会とは本セミナー以外にも、資生堂銀座本社ビル内でがん患者の美容をサポートする「並木通りセミナー」を定期的に開催している。

当日の講師は同センターの関ゆりさんと横山雅美さん。自ら手を上げて同センターに異動したという横山さんは「一瞬でもつらい治療を忘れ、“化粧のちから”で元気に笑顔になっていただけることが嬉しい」と話す。

参加者は30代から70代までの女性６名で、この日のテーマは「肌色づくりと眉・アイラインの描き方」。一口に眉やアイラインの描き方と言っても眉の有り無しによっても異なる。現在眉が無い場合の眉の位置の見つけ方、眉が脱毛して描きにくい場合はアイブロウペンシルの芯は柔らかい方が良いなど、笑いを交えてやさしく丁寧な指導が行われた。

最初は緊張した面持ちだった参加者たちも、メーキャップを続けるうちにどんどん表情が明るくなり、最後はすっかり打ち解けてわきあいあいと感想を述べ合っていた。「せっかくきれいになったから銀ブラをして帰るわ」と言う言葉に「化粧のちから」を実感した。

次回の「ビューティーセミナー@マリオン」の開催は11月22日予定。お問い合わせ・お申し込みは日本対がん協会・美容セミナー係（☎03-5218-4771）まで。

ピンクリボンスマイルウオーク　着々準備中

東京は今年青山・丸の内・日本橋の３コース

六本木ヒルズからいざ出発

６月９日、秋のピンクリボンスマイルウオークに向けて、コースの下見が行われた。

スタート地点の六本木ヒルズに集まったのはウオーク協力を担っている埼玉県、神奈川県、千葉県の各ウオーキング協会の皆さん。神奈川県会長の清水俊夫さん、埼玉県理事･幹事長の森島康武さん、千葉県会長の片山篤さんを始め、それぞれ毎日10数キロ歩いているというベテラン揃いだ。コーディネーターの安樂四郎さんの音頭の元､下見がスタートした。

定員6000人（東京大会）規模のウオークを成功させるためには、何といってもコース作りが肝心。まずは安全第一、加えて参加者を飽きさせず楽しみながら歩けるコースづくりが欠かせない。特にピンクリボンスマイルウオークの場合はピンクリボン運動（乳がんの早期診断、発見、治療）の啓発のために、通常の大会と違って、都心でにぎやかに開催されるのが特徴。参加者も若い人が多く、乳がん手術のリハビリ中や治療中の方、家族連れも多い。中には乳母車を押して参加する人もいる。身体の負担が少なく安全かつ楽しく、しかも話題性を呼ぶコース作りは至難の業だ。

今年の特徴はスタート地点を東京ミッドタウンから六本木ヒルズに変え、青山表参道中心の６キロコース、丸の内地域を歩く11キロコースに加え、丸の内コースに４月に開業したばかりの話題のスポット「コレド室町」エリアを加えた14キロの日本橋コースの３コースとなったことだ。話題性、参加者の満足度は高いが、主催者にとっては頭の痛いことも多い。下見当日も誘導役員の増員、安全なコース設定、各コースの役割分担など、歩きながらも喧々諤々の議論が行われた。女性の参加者の多い大会だけに、誘導役員も女性が活躍する。その一人、千葉県の谷田貝さんは「横断歩道や、曲がり角の誘導など、なかなか思うように歩いてはくれませんね」と苦笑する。オフィス街は週末の通行が少ないとは言え、一般の歩行者に迷惑はかけられない。トイレの場所、誘導役員の配置場所などチェックしなければいけないことも多い。

朝日新聞事業本部時代からウオークに関わる安樂さんだが、毎年大会本番の10月が近づくと「やり残したことは無いか」と無性に怖くなるという。当初はお揃いのピンクジャンパーを着るのも照れ臭かったという安樂さんやウオーキング協会の方々に支えられて、ピンクリボンスマイルウオークは今年で12回目となる。

「リボンムーブメント」が新冊子

正しい情報を知って、自発的に行動してほしい

子宮頸がんの予防啓発活動を行う大学生サークル「リボンムーブメント」が、新たな啓発冊子を制作した。正しい情報を知ることと、自発的な考えや行動の大切さを強調する内容だ。日本対がん協会が医療監修した。この冊子は、リボンムーブメントのメンバーが全国の大学生に渡したり、自治体を通じて受診勧奨の資料として20代の女性に届けられる。小さなバッグにも入れられるＡ５サイズで、年間を通じて5,000部ほど配布される。

編集長を務めたのは、専修大学法学部２年の安間美沙稀さん。冊子制作の経験はないが、リボンムーブメントのミーティングに参加しているうちに、自分もやってみたいと思い挑戦した。制作過程で特に苦労したのは、副反応問題で揺れるHPV予防ワクチンに関する情報の伝え方。メンバーと何度も話し合い、「読み手が共感できるように、公費助成でHPV予防ワクチンを接種したメンバーの体験談を掲載しました。」安間さん自身、初めて公費助成でHPV予防ワクチンを接種した年代のひとり。「子宮頸がんが身近なことだときちんと感じてほしい。自分で選択することが大切」という。

伝えたい思いが強いと、どうしても文字が多くなってしまいがち。だが、それではなかなか読んでもらえない。メンバーみなでレイアウトや写真、挿絵などデザインアイディアを出し合い、工夫を凝らした。

「検診やワクチンのこと、よく知らないまま他人事にしておいたら損というか、もったいないと思うんです。友達に、知らなかったからっていう理由で病気になってほしくない。知ったからには、私は周りにも伝えていこうと思って活動しています」。そんなひたむきな想いから、本冊子を『arch』と名付けた。多くの人とつながっていきたいという願いが込められている。問い合わせはリボンムーブメントのホームページ（http://ribbon-m.com/）へ。

カラフルで手に取りやすい冊子

リレー・フォー・ライフ・ジャパン2014

秋のピークシーズンへ

全国各地でRFL開催中

一年ぶりのリレー・フォー・ライフ（RFL）会場における再会シーン。がん患者同士が駆け寄り言葉を交わします。「今年も会えて良かったね」。「良かったね…」時として言葉にならず、抱き合い喜びを分かち合います。今年度、そんな感動的なシーンを、鹿児島をはじめ熊本、筑波、八戸で見る事ができました。

一方初開催は５月の和歌山、６月の東京町田、そして神戸の３カ所。和歌山では事前の効果的なPR活動により1500人もの参加者が集いました。ライトアップされた和歌山城のもとルミナリエセレモニーは印象的でした。町田は、大雨警報を伴う悪天候のため残念ながらイベントは中止になりましたが、町田の地にがん患者への〝HOPE〟を確実に灯しました。神戸も潮風の心地良いみなとのもり公園にHOPEの文字が浮かび上がりました。夜越しのキャンドルランは名物になることでしょう。

RFLイベント、次の開催地は８月の福島、そして宮城へと続き秋のピークを迎えます。各地では、運営のための実行委員向けトレーニングやボランティア説明会、募金活動が盛んに行われています。興味のあるかたは是非お問い合せ下さい。

日本対がん協会RFL統括マネジャー
岡本宏之　okamoto@jcancer.jp

今後の開催予定一覧

日　程	開催地（★初開催）	会　場
【８月】		
２（土）～３（日）	福島	あづま総合体育館
23（土）～24（日）	宮城	名取市庁舎前　特設会場
30（土）～31（日）	室蘭	道の駅「みたら室蘭」隣接ひろば
【９月】		
６（土）～７（日）	ながいずみ（静岡）	長泉町桃沢野外活動センター
	芦屋	芦屋市立川西運動場
13（土）～14（日）	川越	川越水上公園 芝生広場
	福岡	海ノ中道海浜公園
	栃木	宇都宮城址公園
	福井	ふくい健康の森
14（日）～15（月）	さいたま	農業者トレーニングセンター緑の広場
	広島	しまなみ交流会館・ベルポール広場
20（土）～21（日）	いわて	一関遊水地緑地公園
	ちば	八千代市総合グラウンド
	泉州	市民の森（シェルシアター）
	★横浜・都筑	センター北駅前広場
	信州まつもと	松本市アルプス公園
27（土）～28（日）	東京上野	上野恩賜公園
	静岡	静岡県立大学　芝生緑地
	★三浦半島	神奈川県立保健福祉大学
	岡崎	暮らしの杜（予定）
	京都	京都府立医科大学花園学舎
	宮崎・ひゅうが	お倉ヶ浜総合公園
	奈良	郡山総合庁舎
【10月】		
４（土）～５（日）	とくしま	東新町商店街
	新横浜	日産スタジアム　小机フィールド
	信州長野	城山公園ふれあい広場
	★豊川	豊川稲荷公園
11（土）～12（日）	小松島	しおかぜ公園
	高知	城西公園
	ぐんま	群馬県総合スポーツセンター ふれあいグラウンド
	大分	大分スポーツ公園 大芝生広場
	岐阜	岐阜大学医学部附属病院内 ホスピタルパーク
12（日）～13（月）	大阪あさひ	旭区民センター
25（土）～26（日）	★滋賀	休暇村近江八幡
【11月】		
１（土）～２（日）	えひめ	城山公園堀之内　ふれあい広場
２（日）～３（月）	みなとみらい	臨港パーク